かつてテレビ会議はイベントだった

東洋大学　和田尚久

2020 年の大会は ZOOM で行われた。新型コロナによって鞭が入ったとはいえ、遠隔会議、会合が実用化されたことに大きな感銘を受けた。今年の学会の開催方式を経験して、4 半世紀前の記憶がよみがえった。1990 年代の半ばだったと思うが、本学会の全国大会で、目玉イベントとしてテレビ会議を行ったことがある。私も、微力を尽くさせて頂いたので、今年の試みは感慨深いものがある。

先ず、わたしの状況を書かせて頂く。当時私は福井県立大学の助教授（当時は、准教授でなく助教授という呼称だった）で、ウィークデイは福井におり、週末は東京の家族と過ごしていた。新設の福井県立大学には 1993 年に赴任したが、その前は「日本経済調査協議会」という研究所（当時はシンクタンクと呼んでいた）に勤務していた。

この研究所はプロジェクト・ベースで調査員会を立ち上げ、当時は 2 年程の機関で調査・研究を行い、結果を報告書として発表していた。記者発表を行い、当時の経団連会館にあった財界記者クラブには何度もお邪魔していた。そのような調査委員会の一つとして地方財政に関する委員会を立ち上げたことがある。委員長は財界人にお願いすることが通例で、当時の第一勧業銀行相談役西川氏にご就任頂いた。研究代表者を主査と呼ぶが、当時一ツ橋大学教授の大川先生、学者の委員として、会長を務められたと記憶している ICU の一ノ瀬先生、明治大学の喜多先生、同じく明治大学の大六野先生（政治学）にご就任頂いた。私は研究所の主任研究員としてその委員会（委員長の名をとって西川委員会と呼ばれた）の幹事役であった。

大六野先生以外の先生方に面識はあったが、学会の会長級の大先生 3 人の謦咳に接する機会を得たのはもちろん初めてであった。最初は大変に緊張したが、皆さん優しく接して下さった。喜多先生のお人柄には、心から尊敬の念を持った。一ノ瀬先生には、西川委員会のあとで国土庁（当時）から来た第 3 セクター研究の主査をお勤め頂き、何か所かの調査旅行にご同行頂いた。大川先生は当時先生が主催していた多摩財政研究会に入れて頂いた。要するにお三方の大先生には本当にお世話になった。

ここで表題のテレビ会議の話になる。一ノ瀬先生がテレビ会議を企画された時は ICU を退職なさって専修石巻大学に勤務されていた。当時は喜多先生が会長だった。一ノ瀬先生が、東京・石巻・シアトルを結ぶ 3 極テレビ会議を本学会の大火でやろうと提案された。喜多先生も乗り気で準備を進めたのだが、シアトルはいつしか聞かなくなった。石巻もはっきりしない。あの穏やかな喜多先生が一ノ瀬先生に詰め寄らんばかりになった。

大先生達のお話に口をはさんでよいものか大分迷ったのだが、話が暗礁に乗り上げていたようだったので、石巻市に手紙を出すことを提案したら受け入れて頂いた。どういう手紙にするかもめそうだったので、お許しを頂ければ和田が下書きさせて頂くと申し出たらお

許しが出た。結局石巻は市は参加しなかった。そこでどうするという話になって、これも一ノ瀬先生が岡崎をテレビ会議の相手とするという話をまとめてきた。

テレビ会議のパネリストになることもないだろうしと、いわば他人事でどうなるのかノンビリ眺めていたら、一ノ瀬先生からご指名が入った。和田は福井と東京を毎週往復しているのだから、途中下車して話を詰めてこいとのご指示であった。相手との下話はできており当日の手はずの打ち合わせだけでよかったので、私でも務まった。一度岡崎に降りて打ち合わせをして、二度目が本番である。必然的に、私が岡崎側のコーディネーターを務めることとなった。岡崎側のパネリストを務めて頂いたのは、地元の商工会議所の方（職員ではなく経営者だと思う）だった。パネルディスカッションの中身は全く覚えていない。終わってホッとした感覚はいまだに覚えている。

今年の学会の遠隔会議・セッションに参加して、昔のことを思い出した。コロナは大きな厄災であるが、大きな厄災であるがために今まで掛け声だけで進まなかったテレワークを進め、遠隔会議・学会を行わせた。今の私の悩みは遠隔授業であるが、これも強制されなければ絶対やらないことである。これから何が起きるのか、面倒と思いつつ、楽しみにもしている。

以上